

令和三年三月十日
二宮尊徳の名言に学ぶ

二宮尊徳一日一言 心を耕し、生を拓く 寺田一清編

致知出版社

二宮尊徳一日一言



心を耕し、生を拓く

寺田一清編

1月 1日 報徳を忘るべからず

父母ノ根元ハ天地ノ令命ニ在リ
身体ノ根元ハ父母ノ生育ニ在リ
子孫ノ相統ハ夫婦ノ丹精ニ在リ
父母ノ富貴ハ祖先ノ勤功ニ在リ
吾身ノ富貴ハ自己ノ勤勞ニ在リ
子孫ノ富貴ハ自己ノ勤勞ニ在リ
身命ノ長養ハ衣食住ノ三ニ在リ
衣食住ノ三ハ田畑ト山林ト在リ
田畑ト山林ハ人民ノ勤耕ニ在リ
今年ノ衣食ハ昨年ノ産業ニ在リ
来年ノ衣食ハ今年ノ艱難ニ在リ
年年歳歳ニ報徳ヲ忘ル可カラズ

(報徳訓)

【略解】上記「報徳訓」こそ、報徳翁の根本精神の表明です。いかに天地大自然をはじめとし、父母・祖先・夫婦・子孫の恩恵にあずかっているか、計り知れないものがあります。そればかりか、生存の三大根本である衣食住にかかわる田畑と山林それに従事せられる人民の勤勞、それを総括して産業の社会充実発展の寄与によるもので、思えば無限の恩恵にあずかっている身この生が生かされ守られているのです。この恩徳に報いる、「報徳」精神を人間は決して忘れてはならぬという偉大な訓えです。

2日 天理と人道 (一)

天理と人道との差別を能く弁別する人なし。夫れ人身あれば欲あるは則ち天理なり。田畑へ草の生ずるに同じ。堤は崩れ、堀は埋り、橋は朽ちる、是れ則ち天理なり。然れば、人道は私欲を制するを道とし、田畑の草をさるるを道とし、堤は築きて、立堀はさらひ、橋は掛け替へるを以て、道とす。
(夜話六)

【略解】天理と人道の違いをよく認識している人が意外に少ない。堤は崩れ、堀が埋まり、橋が朽ちる、これも天然自然の道理である。それに対して人間としての対応を工夫することが人道である。

4日 天理と人道 (三)

夫れ人道の勤むべきは、己に克つる教なり。己は私欲なり。私欲は田畑に譬ふれば草なり。克つとは、此の田畑に生ずる草を取り捨つるを云ふ。己に克つは、我心の田畑に生ずる草をけづり捨て、とり捨て、我心の米麦を、繁茂さする勤めなり。是を人道といふ。論語に己に克て礼に復るとあるは此の勤めなり。
(夜話六)

【略解】人道で大事なことは、私欲に克つことです。私欲といえは、田畑に生える雑草の如しで、これをたえず除去することが日々の勤めとして肝要で、「克己復礼」とはこの勤めです。

3日 天理と人道 (二)

此の如く、天理と人道とは、格別な物なるが故に、天理は万古変ぜず、人道は一日怠れば忽ちに廢す。されば人道は勤むるを以て尊しとし、自然に任ずるを尊ばず。
(夜話六)

【略解】尊徳翁の思想哲理に、天理に随順して人道の誠を尽くすという考えが根本にあります。天理という宇宙不変の法則をわきまえて、人為的努力を怠らないのみか最善の努力を尽くすというのが、人間のあるべき姿である。

12日 天地の経文

予が歌に、「音もなく香もなく常に天地は書かざる経をくりがへしつ」とよめり。此のごとし日々、繰り返しくりがへしてしめさるる、天地の経文に誠の道は明らかなり。かかる尊き天地の経文を外にして、書籍の上に道を求める、学者輩の論説は取らざるなり。
(夜話一)

【略解】天地宇宙には天地宇宙の法則が厳然として存在し、気づかない人は気づかないだけで常に運行循環変化をくりかえしている。真の学者というもの、この天地の経文を読みとることを、第一義としている。

論考

1日 克己復礼 (顔淵第十二)

古語に、己に克つて礼に復れば、天下に帰す、仁をなす己による、人によらんやとあり。己とは、手のわが方、向く時の名なり。礼とはわが手を、先の方に向くる時の名なり。

(夜話三八) 卷之二の最後

【略解】 人間というものは、私利私欲に走りがちですが、それに打ち克つことが、礼すなわち愛敬のこころ。利他の行いに努めたいものです。

仁、己に克つて礼に復れば、天下に帰す。己に克つて礼に復れば、天下に帰す。己に克つて礼に復れば、天下に帰す。

5日 道は水車の如し

夫れ人道は譬へば、水車の如し、其形半分は水流に順ひ、半分は水流に逆ふて輪廻す、丸に水中に入れば廻らずして流るべし、又水を離れば廻る事あるべからず、夫れ佛家に所謂知識の如く、世を離れ欲を捨てたるは、譬ば水車の水を離れたるが如し、又凡俗の教義も聞かず義務もしらず私欲一偏に著するは、水車を丸に水中に沈めたるが如し、共に社会の用をなさず、故に人道は中庸を尊む。

(夜話三)

【略解】 天道と人道の違いに水車の譬えをもつて説明せられたが、これまた哲人尊徳翁の鋭敏さがうかがわれるものです。

2日 仁は人道の極

(優者の説、甚むつたしく用ひます)

夫れ仁は人道の極みなり。(中略) 近く譬ふれば此の湯船の湯の如し。是を手にて己が方に揺けば、湯わが方に来るが如くなれども、皆向ふの方へ流れ帰るなり。是を向ふの方へ押す時は、湯向ふの方へ行くが如くなれども、又わが方へ流れ帰る。

(夜話三八)

【略解】 この譬えの湯船は、五右衛門風呂の場合で、強く先方側へ押せば強く返ってくる。これは天理であり、仁といい、義といふのもすべて先方へ押すときの名をさすのである。

6日 水車の中庸

水車の中庸は、宣き程に水中に入つて、半分は水に順ひ、半分は流水に逆ひ昇りて、運転滞ふらざるにあり。人の道もその如く天理に順ひて、種を蒔き、天理に逆ふて草を取り、欲に随ひて家業を励み、欲を制して義務を思ふべきなり。

(夜話三)

【略解】 水車の譬えをもつて、よく無欲と人欲の中庸を説かれている。全くの無欲では、水車は回転しない。といつて人欲(水の流れ)にどつぷり丸ごとつかつていては、水車は役立たない。それと同じく、天道と人道の調和の心がけが大事である。

8日 四つの法

世界の中、法則とすべき物は、天地の道と、親子の道と、夫婦の道と、農業の道との四つなり。この道は誠に、両全安全の物なり。百事この四つを法とすれば誤なし。予が歌に、「おのが子を恵む心を法とせば字ばずとも道に到らん」とよめるはこの心なり。

(夜話四二)

【略解】 この四つの道、すなわち天地の道、親子の道、夫婦の道、そして農業の道に共通するのは、生生化育のこころと営みである。

1日 積小為大 (一)

大事をなさんと欲せば、小さな事を、怠らず勤むべし。小積もりて大となればなり。凡そ小人の常、大なる事を欲して、小なる事を怠り、出来難き事を愛ひて、出来易き事を勤めず。夫れゆえ、終に大なる事あたはず。夫れ大は小の積んで大となる事を知らぬ故なり。

(夜話一四)

【略解】 これがかの有名な「積小為大」の教えです。小事軽んずべからず、小事の積み重ねの威力を思うべきです。

4月 1日 勤・儉・讓

我が道は勤儉讓の三つにあり。勤とは衣食住になるべき物品を勤めて産出するにあり。儉とは産み出したる物品を費やさざるを云ふ。讓は此の三つを他に及ぼすを云ふ。扱て讓は種々あり。今年の物を来年の為に貯ふるも則ち讓なり。夫れより子孫に譲ると、親戚朋友に譲ると、郷里に譲ると、國家に譲るなり。其の身その身の分限に依つて勤め行ふべし。

(夜話統四三)

【略解】 尊徳翁の三本柱「勤・儉・讓」を簡明に説かれたものです。

2日 積小為大 (二)

譬へば百万石の米と雖も、粒の大なるにあらず、万町の田を耕すも、其の業は一畝づつの功にあり。千里の道も一歩づつ歩みて至る。山を作るも一と篋の土よりなる事を明らかに弁へて、励精小さな事を勤めば、大なる事必ずなるべし。小さな事を忽せにする者、大なる事は必ず出ぬものなり。

(夜話一四)

【略解】 耕作も一畝ずつの功。千里の道も一歩から。小事精励の功である。

大道は文字の上にある物と思ひ、文字のみを研究して、学問と思へるは違ひ、文字は道を伝ふる器械にして、道にはあらず、然るを書物を読み道と思ふは過ちならずや、道は書物にあらずして、行ひにあるなり。

【略解】 讀書と実践は車の両輪です。日常の実践なくして真の学問と云うことはできない。

夫れ仁義礼智を家に譬ふれば、仁は棟、義は梁なり。礼は柱なり、智は土台なり。(中略) 家を作るには先づ土台を据え、柱を立て梁を組んで、棟を上げるが如く、講釈のみ為すには、仁義礼智と云ふべし。之を行ふには、智礼義仁と次第して、先づ智を磨き礼を行ひ義を踏み仁に進むべし。

【略解】 修身は仁義礼智に尽きるが、その順序次第としての智礼義仁にも尊徳翁の洞察眼が光っている。

神道は開国の道なり。儒学は治国の道なり。佛教は治心の道なり。故に予は高尚を尊ばず。卑近を厭わず。此の三道の正味のみを取り。正味とは人界に切用なるを云ふ。切用なるを取りて、切用ならぬを捨て、人界無上の教を立つ。是を報徳教と云ふ。たはむれに名付けて、神儒佛正味一粒丸と云ふ。其の功能の広大なる事、挙げて教ふべからず。

【略解】 神道・儒教・佛教の正味のみを取られ、無上の教えを授けてくださった。正に日本教の粹と言ふべきでしょう。

(二宮公卿道歌)

父母もその父母も我が身なり
われを愛せよ われを敬せよ
はやく起きにまゐる勤めをぢあへし
夢で此の世をくらしゆく身は
日々を精ある心のちりあくれた
洗つちかして我を助けよ
天地の神と皇とのめぐみにて
世をやすくする徳に報えや
驚きといはば無多とや人の田のうらん
叫べばこたふる鈴の声

二宮尊徳翁「略年譜」(年令は数え年)

天明七年(一七八七) 一歳
この年七月二十三日、現小田原市栢山に生まれ、金次郎と名づけられる。
寛政三年(一七九一) 五歳
酒匂川決壊、所有地の大半流失。
寛政十一年(一七九九) 十三歳
松苗二百本を買い酒匂川堤に植える。
寛政十二年(一八〇〇) 十四歳
九月、父利右衛門(四八)が没する。
享和二年(一八〇二) 十六歳
四月、母よし(三六)急病のため死す。
六月、酒匂川再び氾濫。一家離散し、伯父万兵衛方に寄食。

享和三年(一八〇三) 十七歳

菜種七、八升を得、夜学の灯に使う。捨苗を植えて米一俵を収穫。
文化三年(一八〇六) 二十歳
生家の近くに小屋を建てて独居。田地九畝十歩(九アール余)を買い戻す。
文化六年(一八〇九) 二三歳
田地二反六畝十歩(二六アール余)を買い戻す。
文化十一年(一八一四) 二八歳
服部家の使用人を中心に「五常講」開始。
文化十四年(一八一七) 三一歳
中島きの(一九)と結婚。田地三町八反

余。

文政元年(一八一八) 三二歳
服部家の家政整理を引き受ける。
文政二年(一八一九) 三三歳
長男誕生。まもなく死亡。きのと離婚。
文政三年(一八二〇) 三四歳
四月、岡田波子(二六)と結婚。
文政六年(一八二三) 三七歳
田畑、家財を処分。桜町に移転。
文政十二年(一八二九) 四三歳
成田山にて断食静思。開眼。
天保六年(一八三五) 四九歳
谷田部茂木藩の復興事業に着手。
天保七年(一八三六) 五十歳
大凶作。烏山藩を救急援助する。

天保八年(一八三七) 五一歳

小田原藩主忠真公死去。烏山領の復興事業着手。
天保九年(一八三八) 五二歳
小田原領・下館領の復興事業に着手。
天保十年(一八三九) 五三歳
相馬藩土富田高慶(二六)入門。
弘化二年(一八四五) 五九歳
斎藤高行(二七)福住正兄(三三)入門。
相馬藩の復興事業始まる。
嘉永六年(一八五三) 六七歳
日光神領復興事業を受命。四月発病。
安政三年(一八五六) 七十歳
十月二十日逝去。今市の如来寺に葬られる。法名「誠明院功誉報徳中正居士」。

…明治(後)

二宮金次郎

♩ = 100 作詞・作曲者不詳

1. 1 3 3 | 2. 2 1. 2 | 3. 3 5. 5 | 6. 6 5 0 |
 しばかりなわなないわらじをつくり

3. 3 5. 5 | 6. 6 5. 3 | 2. 2 3. 2 | 1. 1 1 0 | 2. 2 1. 2 |
 おーやのてをすけおととをせわしきょうだい

3. 3 5. 5 | 6. 6 5. 3 | 5. 6 5 0 | 6 | 1 | 5. 3 |
 なかよくこうこうつくすてほんは

1 3 | 5 5 | 6 5 | 3. 2 | 1 - 1 0 ||
 にのみやきんじろう

1 柴刈り繩ない草鞋をつくり
 親の手を助け弟を世話し
 兄弟仲よく孝行つくす
 手本は二宮金次郎

2 骨身を惜まず仕事を はげみ
 夜なべ済まして 手習読書
 せわしい中にも 携まず学ぶ
 手本は二宮金次郎

3 家業大事に 費をはぶき
 少しの物をも 粗末にせず
 遂には身を立て 人をすすく
 手本は二宮金次郎

明治四十四年六月「尋常小学唱歌(二)」に
 載った明治唱歌の特徴の一面を代表する「徳
 目唱歌」の一つですが、過去の教訓歌として
 ふりかえるも、またむべなるかな。



其機如此。
 一人貪戾 一國興讓
 一家仁 一國興仁
 一國作亂

(注) 貪戾(たんかり) (欲か深くて道理にそむける)

(参照)

中国古典 南川ソフィア文庫
 『大学』 45ページ(92ページ)
 96ページ

二宮金次郎の像
 読んでゐる本は『大学』である。